



TOKYO 2020



住所: 東京都中央区日本橋大伝馬町13-8  
メディカルプライム日本橋小伝馬町3階  
TEL: 03-3639-3110 FAX: 03-3639-3112

2021年7月 診療カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
	28	29	30	1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23 五輪開会式	24
25	26	27	28	29	30	31
8/1	2	3	4	5	6	7

休診日 午後休診 18時最終受付

一般外来	9:30-12:00	16:00-19:00
発熱外来	12:00-13:00	15:30-16:00

1. 内科・生活習慣病

2. 心臓病・糖尿病

3. 睡眠時無呼吸症

4. 土曜日診療

5. 発熱外来

・熱中症に注意してください  
・ワクチン接種予約は一時中止しています



ホームページ  
院長ブログ公開中

「今月の言葉」

「ほんの瞬間にせよ、眩しいほどに真っ赤に燃え上がるんだ。そして、後には真っ白な灰だけが残る燃えカスなんて残りはしない。真っ白な灰だけだ」  
(「あしたのジョー」より)



お知らせ

新型コロナワクチンの個別接種の受付は  
電話・WEBとも一時停止しています

再開のお知らせはホームページをご覧ください

- ・予約専用電話03-5843-6255 平日(月~金)10時~13時
- ・7月8日(木) 18時 最終受付
- ・夏季休暇 8/10(火)~8/14(土)

さいとう内科・循環器クリニック  
LINE公式アカウント



「ひねもすのたり日記」

“ちばてつや”さんの「ひねもすのたり日記」という漫画をご紹介します。ちばてつやさんといえば「あしたのジョー」「のたり松太郎」などで有名な漫画界の大御所で今年で82歳におなりだそうです。最近ではあまり新たな作品については耳にしませんでした。「ひねもすのたり日記」は実に18年ぶりの新作とのこと。ちなみに「ひねもす」とは「朝から晩まで」、「のたり」とは、「のどかにゆったり」といった意味です。「朝から晩までゆったりすごす」日記ということで、1話が4ページほどのエッセー的な漫画です。戦後、家族で満州から引き揚げてきたときの昔話や、老いを感じる日常の生活などが丁寧に綴られています。

私は子供のころはそれほど多くは漫画本を読みませんでした。日暮れまで草野球や外遊びで忙しかったせいか、漫画自体に興味が無かったのか、はたまた親に漫画を禁止されていたのか、理由はよく覚えていないのですが、読む漫画は限られていました。そのようななかで「ドラえもん」「おぼQ」などの藤子不二雄さんの作品をはじめ、いしいひさいしさんの「がんばれたぶちくん」、水島新司さんの「ドカベン」などとともに、「あしたのジョー」は兄と一緒に夢中になって読んだ作品の一つです。

「あしたのジョー」が一世を風靡したのは昭和40年代、私は昭和44年生まれですので、自分が「あしたのジョー」に夢中になったころには、すでに新品で購入できるものは限られており、とくにジョーのライバルの力石徹が試合で亡くなった8巻や最終巻である20巻は入手困難で、私と兄が市内のあちこちの書店を回ったり、友達に頼みこんだりして新作や中古の本を買い集め、何とか全巻揃えることができました。8巻はあばら骨の浮かんだ力石徹がメラメラとした赤い炎の中で両手ぶらりのポーズをとっている表紙や、通常より分厚く黒い線の入った最終巻の20巻の重みがいまでもよく覚えています。

5年ほど前に職場の同僚が「大人買い」で中古の「あしたのジョー」を全巻購入したというので、頼んで借りて読ませてもらいました。第1巻では「東洋の大都会と言われるマンモス都市 東京 そんな中ふきだまりのようなそんな街があることをご存知だろうか?この物語はそんな街の一角から始まる」から始まり、最終巻では「真っ白な灰になった」ジョーが描かれています。ドラマチックなまでのジョーの人生を描いたちばてつやさんの最高傑作はジョーの成長と青春、まわりの人々の温かさとは時に厳しさ、人生の輝きと哀しみすべてがこめられていて、大人になって読んだ自分もあらためてその圧倒的な作品が持つ力に魂をゆさぶられました。

ところで私がこの「ひねもすのたり日記」を読んで感銘を受けたのは、ちばてつやさんが、あの「あしたのジョー」の作者で懐かしかったことでもあります。何といっても満州からの引き揚げのことが描かれているからだと思えます。ちばさんは昭和14年生まれですので、2年前に亡くなった私の父の17年下です。私の父も子供時代、父親の仕事の関係で満州の大連に住んでいて、戦後、満州からの引揚げ組で大変な思いをして日本に帰ってきたそうです。寡黙な父は私に引き揚げやその後日本で苦しい生活の話はほとんどせず、そのまま亡くなりましたが、父の2つ下のおじから、満州から船で引揚げてきたこと、船が九州について、そこからびしょびしょのぬかるんだ道を兄弟手をつないで、とぼとぼ歩いて帰ってきたことなど父が話していたと聞きました(おじも辛かった記憶のせいか、忘れてしまったそうです)。満州からの引揚げの話といえば藤原ていさんの「流れる星は生きている」が有名ですが、子供の視点から厳しい引揚げと戦後の暮らしを描いたこの作品は、亡き父がひっそりとしまいこみ、家族にもほとんど話さなかった苦しい子供時代の記憶と心情に近いものを描いているのではないかと思います。

「ひねもすのたり日記」では若いころの家族のことや最近の日常生活のこともユーモアを交えて描かれています。後期高齢者になったちばてつやさんが医療機関にかかる様子も読んで大変参考になりました。どのお話をとってもちばてつやさんの温かい人柄がしのべれます。余談ですが自分が小学生のころ読んだことがある漫画の「キャプテン」の作者のちばあきおさんが、ちばてつやさんの弟さんだという事実も今回初めて知りました。

80代の方々をみると、病気を抱えている方も多いのですが、まだまだ気持ちは若くエネルギーで、心も元気な方もたくさんいらっしゃいます。ちばてつやさんのように新たな作品を生み出している方もいらっしゃいます。ますます元気にいつまでも活躍してほしいと心から願っています。

クリニックの待合室には「ひねもすのたり日記」を置く予定であります。是非みなさんにも手にとっていただきたいと思っています。楽しみにしてください。

文責 齋藤 幹

